

## ～江戸時代の道、現わる～



野上から和田付近の南郷道 (1/25000)

現在、県道門井山方線の野上地内では、枇杷川を越えて野上へ南下する道路を造成する工事が進んでいます。ここには、中世の依上道（奥州白河から大子地方を経て瓜連へ至る道筋）を原形とする、江戸時代のいわゆる「\*南郷道」（南郷街道）の一部が存在すると想定されていました。もとの南郷道は、現在の県道のわずかに西の林の中にあるはずと考えられていましたが、これまでは確認することができませんでした。

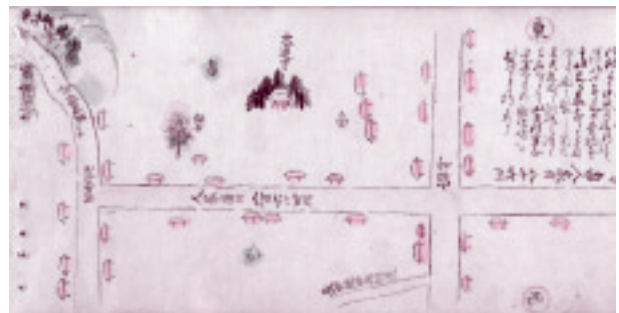
この未確認だった南郷道が、工事に伴う樹木の伐採によって明らかになりました。100mほどの短い区間ですが、道幅は約2mあり、野上から枇杷川の低地に下りていく山道です。枇杷川の北には、和田の集落に向かって上っていく南郷道が続いています。



▲発見された古道

「南郷道」は水戸と奥州棚倉（福島県棚倉町）を結ぶ街道で、江戸時代には、東海道や中山道などの五街道に次ぐ脇往還として利用されてきました。難所の多さから、参勤交代などの公的な通行に使われることはありませんでしたが、一般の旅人や商人、年貢米等の物資輸送には、久慈川舟運を併用することで一定の利便性を確保していたようです。現在の国道118号線と重複する場所も多く、常陸国北西部の主要な街道でした。

安政2年（1855）に水戸藩士の加藤寛斎が描いた『常陸国北郡里程間数之記』では、この部分は和田川（枇杷川の誤り）へ向かって下り坂となっていて、道の脇には山が迫る様子が描かれています。



▲「常陸国北郡里程間数之記」（左上方の道）（国立国会図書館所蔵）

工事の過程でやぶが刈り払われたため、今まで存在が知られていなかった石造物も確認されました。表面に「馬頭観世音菩薩」と刻まれていて、年代は確認できませんが、高さ94cm、最大幅55cm、厚さ26cmの花こう岩製で、仰向けに倒れた状態で発見されました。この道が古くから使用されてきたことの証となるものでしょう。工事に伴い、この付近に移設されることとなります。

発見された  
石仏▶



※「南郷道」「南郷街道」の呼称については定まった定義がありませんが、広く認知されていることを踏まえ、本稿ではそのまま使用しました。

※南郷道についての概要は歴史民俗資料館展示図録『水戸と奥州をつなぐもうひとつの道 南郷道（2014）』をご覧ください。

文書館 ☎52-0571